

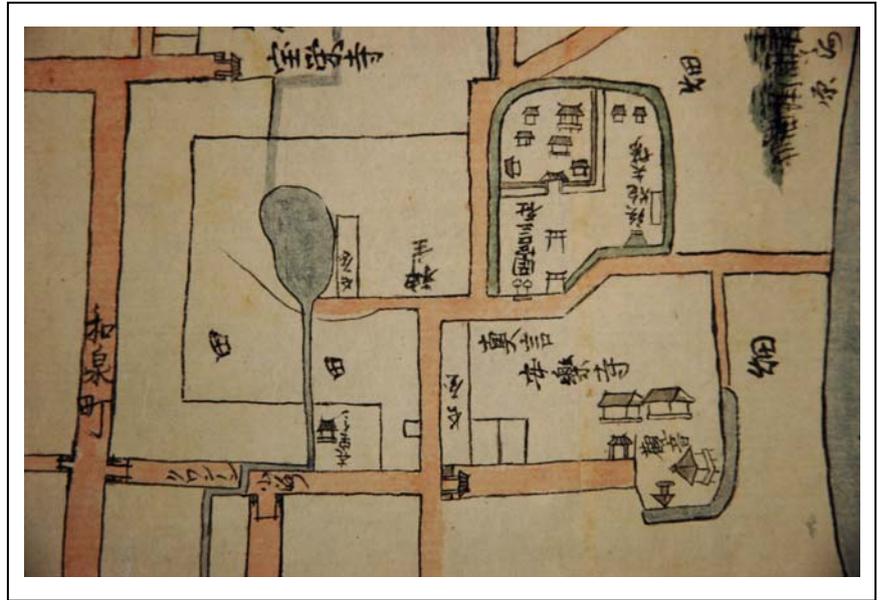
安楽寺と岡宮神社

陰陽道では北東（丑寅）の方向を鬼が出入りする方角として「鬼門」と呼びます。お城からみると鬼門の方向に安楽寺と岡宮神社があり、この寺社は城の鬼門除けの位置づけであるといわれています。

1 江戸時代後期の絵図にみえる安楽寺と岡宮神社

和泉町から安楽寺へ行く道筋は「観音小路」と呼ばれていました。この名称は安楽寺の観音様へ通じる道であったことに由来します。小路の正面には観音堂があり、安楽寺の本堂は北側に描かれています。観音堂の北で現在は墓地になっているあたりに建物がありました。

その北には岡宮神社（岡宮三社とある）があり、二つの鳥居をくぐると奥に拝殿と本殿や末社が建っていました。境内は水路がめぐり、この時代には神社の東には鉄砲矢場が設けられていました。その東は畑と河原だったようで、松でしょうか樹木が描かれ「東河原」と書かれています。神社の西には神主の住居があり、池と紙漉川が描かれています。現在新しい道もできていますが、ここに描かれている道は、今も確認することができます。



安楽寺と岡宮三社

「文化5年から天保6年ころ 松本城下絵図」より

2 安楽寺

真言宗で、現在は「安原山大安楽寺」と呼んでいます。

(1) 『信府統記』の記載 一藩主祈願所・談林所一

『信府統記』によれば、真言宗高野山竜光院の末で、開基は行基、中興開山を法印憲孝だと記していますが、行基が開基かどうかは定かではありません。観音堂の本尊は十一面観音（『信府統記』は行基作と知っている）と千手観音（同書は安阿弥作と知っている）で、小笠原氏に命ぜられて秘仏として以来、住職もこれをあけることがないし開帳のさいも開けたことはない、護摩堂の本尊は不動尊で、藩主水野忠周が寄付した木造の三宝荒神・弁財天・虚空蔵菩薩や十二天などの画像などもある、本坊には金剛界の大日如来像がある、観音堂・護摩堂・仁王門は松本城の丑寅の方角で



観音小路から観音堂を望む

鎮護の地であるから代々の城主が修理をしていて棟札があると記しています。

場所については、古くは安原徒町（徒士町のこと）にあったがいつごろか現在の場所に移ってきたと記しています。これについては同書の戸田康長の項に、徒士町の南側に安楽寺と観音堂があってその跡は近きころまで明地になっていた、現在地に移ったのは徒士町が出来たころではないかということが注記されています。

さらに『信府統記』には興味を引く記事があって、元禄9年に常憲院（5代将軍綱吉のこと）が周易の講義をするというので、安楽寺15世の尊岑が拝聴したいと申し出た、藩庁では法流と松本城主の祈願所であること、祈祷の寺領は50石であること、松本領内の法談林所であること、三色の色衣地であることを言上するように指示し、それが効をそうして尊岑は、綱吉の講義の席に列することができた、宝永年中に幕府から松本藩領内の談林所（仏教の学問所のこと）の場所を尋ねてきたとき安楽寺だけであると報告した、そのため住持は年藤（出家してからの年数のこと）を積んだものであることが必要である、享保三年には19代住職を決めるため藩主水野忠周が長谷寺へ使いを派遣して後任選を依頼した、と書かれています。

以上のことを整理すると、最初は城外の北の方にあったようで、それが現在地に移転された、水野氏時代の安楽寺には観音堂・護摩堂・本坊・仁王門があって、それぞれに本尊があったが、特に観音堂の千手十一面観音菩薩は秘仏とされて崇められていた、藩主とのかかわりが深く歴代城主は祈願所としていた、そのため建物の修理は城主が行った、仏法の学問所との位置づけであったため住職にはそれなりの修行年数を積んだものでないとなることができず、その選任には藩主水野氏も関わっていた、という様子が見えてきます。

寺中には、成就院・善福院・養福院・自性院・宝蔵院・蓮華院・大乘院・三光院・宝珠院・広福院の10寺があったようですが、享保期には6寺が無くなり、善福院・養福院・自性院・大乘院の4寺だけになっていました。

別の史料に、水野時代には正月16日に安楽寺の僧が20人、本丸御殿へ来て大般若経を転読したと記されていますので、学問所の名のとおり安楽寺でかなりの人数の僧が仏法を学んでいたようです。

（2）嘉永元年の安楽寺什物取調帳から

河辺文書のなかに戸田時代である嘉永4（1851）年5月の「和泉町安楽寺什物取調帳」があります。それには建物ごとに仏像・仏具・道具・勝手道具・生活用具・書物などが書き上げられています。全てを紹介することができませんので、各建物にあった仏像のみ下表に書き出しました。

建 物	諸仏（ ）内は注記と複数数あるもの 仏名は記載どおり
客殿	本尊大日如来 不動明王 厨子入り弁才天 両大師（2）
観音堂	十一面観世音（宮殿の内 秘仏）千手観世音 正観音（2） 十一面観世音（前立） 愛染明王 地藏尊 不動明王 阿弥陀如来（裏堂）三拾三所観世音（数躰）
太子堂	聖徳太子 將軍地藏尊 古仏厨子入（3） 弘法大師 不動尊 （無し）天狗 毘沙門天（厨子入り）
土蔵2階	聖天像（2） 毘沙門天 正観世音 大日如来 不動尊

水野時代の『信府統記』に見られた本坊が客殿になり、護摩堂の記載はなく、太子堂が加わっています。時代の移り変わりのなかで建物にも変化があったのでしょう。

(3) 松本三十三番札所の一番

松本三十三番の一番で、その御詠歌は「六つのちり はらわずとても 其のままに 安く楽しむ心ともがな」でした。

安楽寺は城主の祈願や僧の修行の場としての役割を果たし、現世安穩を願う庶民には観音堂がその役割を果たしていたのではないかと考えられます。安楽寺へ通ずる小路がもっぱら観音小路と呼ばれているのは、この観音様への深い思い入れが現れているようです。

(4) 明治以後

廃仏毀釈で明治5年に廃寺になり、本尊以下を宝栄寺に移し聖徳太子像は正行寺寺中の淨信寺に預け、伽藍は取り壊されて廃絶しました。檀信徒はそれを惜しみ、明治24年に紀州根来の大伝法院塔頭宝幢院を移し、預けてあった仏像を戻して復興させました。大安楽寺と改称したのは大正11年といえます。(旧版『松本市史』による)



仁王門と

平成21年に竣工した観音堂



厄除け縁日におかれる

住職手編みの大わらじ

3 岡宮神社

安楽寺の北に位置し、寺と同様に城の鬼門の方向を守っているといわれています。

(1) 祭神

健^{たて}御名^{みな}方^{かた}富^{とめ}命^{みこと}で、左の相殿は菅田^{ほんだ}別^{わけ}尊^{のみこと}(正八幡宮)、右の相殿は伊邪那^{いざな}美^{みの}尊^{のみこと}(熊野権現)の三社が祭られています。石川数正の代に提出させた検地帳には桐原分のなかで5石を神領としています。

(2) 『信府統記』の記述

勸請の年代は不明である、祭礼は7月23日で、その際には町奉行や目付や警護の足軽同心などが出る、祭礼費用に粳10俵が城主よりくださる、造宮は城主が行い、祈祷料として粳5俵がくださる、正月5月9月に湯立を行うときは別に粳3俵が寄付される、水野忠直は十八神道の器物を寄付し女鳥羽川以北は武十



5月の祭礼の日の神社



産神にするようにした、末社のなかに牛頭天王の宮があり祭礼は6月15日である、と書かれています。

安楽寺と同様に藩主とのかかわりが深い神社でした。深志神社が南を代表し岡宮神社が北を代表する形になっています。

(3) 水野氏の造営と神輿の寄進

石川康長は慶長19年に岡宮明神に神領を3石寄進しています(『信濃史料』第20巻)。現在に伝わるものでは水野氏が残したものが多く、水野氏がかかわりを深めたことがわかります。

本殿は、水野忠職が寛文3(1663)年に改築奉獻したものと伝え、三間社流れ造りで、現在は銅板葺ですがもともとは柿葺であったようです。直線の部分が多く組物や彫刻が無いのが特徴であるといわれています。

神輿は、元禄13(1700)年に、水野忠直が寄進したもので、正方形の四方から屋根が真ん中に集まってくる四柱造という屋根の棟に、金属製の鳳凰を乗せ、水野家の沢瀉の紋をつけ、内部を黒漆、外部の鳥居や欄干を朱漆でぬり、軒から瓔珞をたらしして飾っています。

本殿や神輿は松本市の指定文化財ですが、両者ともに元禄期の文化を伝える松本市では数少ないものの一つです。



西側からみた本殿 寛文3年



神輿 元禄13年

『新編 松本のたから』より